

九州圏における地域活性化事例

1. 全村森林公園・諸塚 ―百彩の森づくり―	対象地：諸塚村（宮崎）	1
2. 豊後高田市「昭和の町」づくり	対象地：豊後高田市（大分）	1
3. ～農業者によるバザール～	対象地：日田市大山町（大分）	2
4. 実のある交流で日本一（自称）の棚田の里のむらづくり	対象地：水俣市（熊本）	2
5. 「学習と交流」による地域づくり	対象地：小国町（熊本）	3
6. 黄金の郷・山ヶ野、歴史と人が息吹くまちづくり	対象地：霧島市（鹿児島）	3
7. 笠祇の元気な里づくり	対象地：串間市笠祇地区（宮崎）	4
8. 「柚子の里づくり」で新産業を創出	対象地：日田市（大分）	4
9. 悠久のときの流れに包まれた英彦山	対象地：添田町（福岡）	5
10. むらづくり活動	対象地：安心院町（大分）	5
11. 「農業と観光が調和した地域づくり」を目指して	対象地：豊後高田市（大分）	6
12. 道路清掃による村づくり	対象地：西原村（熊本）	6
13. 島民手づくり展望台	対象地：五島市（長崎）	7
14. 安心院方式グリーンツーリズム	対象地：宇佐市（旧安心院町）（大分）	7
15. 絶滅危惧種の保護を契機とした農村環境の保全	対象地：久留米市（旧田主丸町）（福岡）	8
16. 阿蘇の草原保全運動	対象地：阿蘇郡一帯（小国町、高森町、南小国町、産山村、西原村、南阿蘇村）	8
17. 昭和30年代の農村風景の再現	対象地：高鍋町（宮崎）	9
18. 行政に頼らない未利用資源を活用した集落づくり	対象地：鹿屋市（旧串良町）（鹿児島）	9
19. めだかの保全と棚田を活用した地域活性化	対象地：日置市（鹿児島）	10
20. 大分県、福岡県の県境を越えた山国川流域を単位とする地域づくり活動	対象地：中津市、豊前市など県境2市5町3村（大分・福岡）	10
21. 島内、離島へのI・Uターン希望者に対する農業研修支援活動	対象地：奄美市（鹿児島）	11
22. 廃校を拠点に自然体験やものづくりを通して地域間交流をめざす農村自然学校	対象地：南九州市（旧川辺町）（鹿児島）	11
23. 村全体のテーマ性の統一と交流人口増加による地域づくり	対象地：西米良村（宮崎）	12
24. 広域的なネットワークによる農漁業体験型の観光推進	対象地：松浦市ほか（長崎）	12

1. 全村森林公園・諸塚 ―百彩の森づくり― 対象地：諸塚村（宮崎）

■実施団体：諸塚村自治公民館組織

■受賞：平成 15 年度過疎地域自立活性化優良事例表彰（総務省）

■概要

諸塚村では、全ての住民が自治公民館組織に属し、地域の集落組織と村行政が一体となって、産業の振興や地域づくりに長年取り組んでおり、その取り組みは「諸塚方式」と呼ばれている。

自治公民館活動をベースとして、村の基幹産業である林業を活かした事業を展開し、森の恵みを生かした都市住民との交流を積極的に行っている。

■評価点

- ・全ての住民が自治公民館組織に属し、産業の振興や地域づくりに長年取り組んでいる。
- ・毎月定例会を開いて、連絡事項の徹底や産業振興のための話し合いを行っている。
- ・村の施策は、自治公民館・実行組合を通じて各戸に伝えられ、また、各戸からの要望事項は、これらの組織を通じて村に伝えられる。その一つの成果として、村では 5 0 年以上納税率 1 0 0 %が続いている。
- ・この自治公民館活動をベースとして、村の基幹産業である林業を地域経営の柱としながら、都市住民との交流を積極的に行うことで林業の複合経営化を図り、環境と共生できる社会づくりを目指している。
- ・産直住宅プロジェクトは木材生産者が都市部の建設主を産地に招待し、諸塚産材の品質について納得いくまで話し合う一方で、上棟式や竣工式には木材生産者が出向くなど、「建てて終わり」ではなく、交流の始まりとして捉え、生産者と建築主との間に信頼関係を築くことに成功している。
- ・また、空き家を村が買い取り、体験交流事業の拠点施設を「森の古民家」として整備し、四季折々の山村体験事業を展開している。



資料：総務省 HP <<http://www.soumu.go.jp/c-gyousei/2001/kaso/h15hyoushou.htm>>

2. 豊後高田市「昭和の町」づくり 対象地：豊後高田市（大分）

■実施団体：大分県豊後高田商工会議所

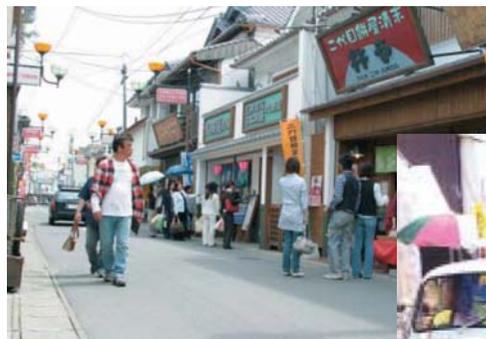
■受賞：平成 16 年度過疎地域自立活性化優良事例表彰（総務省）

■概要

商店街が元気だった昭和 30 年代をテーマとして、商店街の街並み景観の整備をはじめとした各種事業の実施により、「生きた昭和の町」づくりに取り組んでいる。お店に代々伝わり歴史を物語る「お宝」を「一店一宝」として店頭展览展示したり、そのお店の自慢の逸品を「一店一品」として販売するなどの取り組みを行っている。平成 14 年度に整備された昭和ロマン蔵には、平成 15 年度には 21 万 5 千人が訪れている。

■評価点

- ・商店街街並み修景事業として、昭和 3 0 年代をコンセプトに、「昭和」の趣を持つ外観に整備するなどのハード事業、空き店舗をチャレンジショップやギャラリー等に活用する事業を実施している。
- ・「昭和の町」の拠点施設として、商店街に隣接した広大な古い農業倉庫を「昭和ロマン蔵」として整備する一方、その中に、日本一の駄菓子屋のおもちゃコレクションを展示した「駄菓子屋の夢博物館」を誘致している。
- ・数年前まで寂れきっていた商店街に、現在では連日個人観光客や大型観光バスが押し寄せ、年間 2 0 万人以上もの観光客が訪れるといった、まさに奇跡と呼ぶにふさわしい程の賑わいを見せている。



資料：総務省 HP <<http://www.soumu.go.jp/c-gyousei/2001/kaso/h15hyoushou.htm>>

3. ～農業者によるバザール～

対象地：日田市大山町（大分）

■実施団体：大分県大山町農業協同組合

■受賞：平成 17 年度過疎地域自立活性化優良事例表彰（総務省）

■概要

地元農産物のブランド化、消費者への新鮮で安全な農産物の提供、農業者の生産意欲の高揚と農業所得の増加を図るため、農業者によるバザール「木の花ガーデン」をオープンしている。農家が主体となった出荷システムを採用し、生産者の顔の見える安全でおいしい農産物を消費者に提供している。県内外に店舗展開し、消費者のニーズ把握やイベント開催による情報収集に努める一方、農家の家庭料理を楽しむレストラン「オーガニック農園」等による地域からの情報発信を行い、交流人口の増加に寄与している。

■評価点

- ・「梅栗植えてハワイに行こう」のキャッチフレーズのもと、農業の構造改革である第一次N P C運動を昭和 36 年に開始し、その後、心も豊かな農業者を育成するための第二次P C運動、若者農業者の育成と農業を通じた国際交流を行う第三次N P C運動を展開し、これらの運動を通じて、大山町では、地元の資源を活かし、自由な発想で農業を取り組む素地が形成されている。
- ・地元農産物のブランド化などを目的とした「木の花カルデン」では、農家は各自で集荷場に農産物を持ち込み、出荷量や価格、出荷先を農家自身が決定するという農家が主体となった出荷システムを採用し、生産者の名前を書いた統一規格のシールを農産物に貼り付けることにより、生産者の顔の見える安全でおいしい農産物を消費者に提供している。
- ・大山特産の梅で作った梅干しなどの特産品は、13 億 6 千万円の売り上げ、190 万人の年間購買客を数えるまでとなっている。
- ・福岡都市圏など県内外に店舗展開し、消費者のニーズ把握などの情報収集に努める一方、大山店には農家の家庭料理を楽しむレストラン「オーガニック農園」や年代ものの梅干を貯蔵する「梅蔵物産館」などがあり、地域からの情報発信を行っている。



資料：総務省HP<<http://www.soumu.go.jp/c-gyousei/2001/kaso/h15hyoushou.htm>>

4. 実のある交流で日本一(自称)の棚田の里のむらづくり 対象地：水俣市（熊本）

■実施団体：水俣市久木野地域振興会

■受賞：平成 17 年度過疎地域自立活性化優良事例表彰（総務省）

■概要

水俣市久木野ふるさとセンター愛林館を拠点に、久木野地区の住民が一体となって、様々な事業展開を進めている。館長を全国公募により選出し、棚田等の地域の財産を最大限に活かして、都市住民と地域住民が相互に利益を得られるような独自の取組みを展開している。「エコロジーの原則（風土・循環・自立）に基づくむらづくり」をテーマに、水俣市の環境のまちづくりの牽引車として、また、美しい棚田の地域としてのイメージを深化・発信するなど地域の活性化・魅力増進に寄与している。

■評価点

- ・平成 6 年 4 月 1 日に発足した水俣市久木野地域振興会のもと、水俣市久木野ふるさとセンター愛林館を拠点に、久木野住民が一体となって、地域特性を活かした特産品の製造販売、環境教育、棚田コンサートなどに取り組み、地域ならではの様々な事業展開を進めている。
- ・これらの取り組みは、単なる観光客として一方的にもてなすだけではない、都市住民と地域住民が相互に利益を得られるような独自の取組みとなっており、また山村や棚田の公益性を理解するという世論形成に力点を置いて各種の活動を展開している。このような取組みを通じ、ボランティアの造林としては日本最大級となる 21ha 規模での照葉樹の植樹が実施され、交流事業に参加する者の深い理解が得られることとなり、リピーターも多く、I ターンの定住も見られている。



資料：総務省HP<<http://www.soumu.go.jp/c-gyousei/2001/kaso/h15hyoushou.htm>>

5. 「学習と交流」による地域づくり

対象地：小国町（熊本）

■実施団体：財団法人学びやの里

■受賞：平成 18 年度過疎地域自立活性化優良事例表彰（総務省）

■概要

郷土の偉人、北里柴三郎博士が提唱した「学習と交流」の精神を受け継ぎ、町内外において交流事業や人材育成事業を行い、町の活性化を図っている。

ツーリズムを実践していく人材の育成、情報の発信、ネットワークづくり等を行う九州ツーリズム大学を開講し、農業体験等実践的なプログラムを実施している。また自然体験キャンプなど小国町の自然とふれあうプログラムを組んだおぐに自然学校を開講している。また、卒業生の中から町内への移住者を生み出しており、こうした I ターン、U ターン者は農家民宿・農家レストランの経営や都市と農村をつなぐ情報誌の発行など様々な分野のリーダーとして活躍している。

■評価点

- ・九州ツーリズム大学は、平成 9 年度に開講以来、地域の自然を活かし、農業体験や「うさぎおい」等の実践的なプログラムのもと、ツーリズムを実践していく人材の育成、情報の発信、ネットワークづくりを行っている。
- ・卒業生の活動範囲は九州のみならず全国に及び、ツーリズム時代の担い手として様々な分野で活躍している。また、卒業生の中から町内への移住者が出ており、こうした I ターン、U ターン者は、農家民宿・農家レストランの経営や都市と農村をつなぐ情報誌の発行など地域における活動の中心として活躍している。
- ・おぐに自然学校は、平成 12 年から、自然とのふれあいを通じた環境教育、食農教育プログラムを行っており、子どもの成長期において自然と触れ合う大切さを伝えている。
- ・都市部からも多くの参加があり、交流の場ともなっている。



資料：総務省HP<<http://www.soumu.go.jp/c-gyousei/2001/kaso/h15hyoushou.htm>>

6. 黄金の郷・山ヶ野、歴史と人が息吹くまちづくり 対象地：霧島市（鹿児島）

■実施団体：山ヶ野金山文化財保護活用実行委員会

■受賞：平成 18 年度過疎地域自立活性化優良事例表彰（総務省）

■概要

1640 年に発見・開山された山ヶ野金山の史跡保全や、未だ埋もれている史跡の再発見に努めると共に、地域の伝統行事の継承にも努めている。また、史跡を活かしたまち並み整備を行うなど地域住民が主体となったまちづくりを行っている。

毎年「黄金の郷・山ヶ野金山史跡めぐりウォーキング」を実施し、都市部との地域間交流を積極的に行っている。また、地元中学生による史跡説明や青年による郷土芸能の披露、地元住民によるお茶や手づくりの漬け物の提供など、地域一体となった「おもてなし」にリピーターも多い。

山ヶ野地区に残る史跡、伝統行事、景観などを保存・継承しながら、文化財や田舎のよさについて、地域住民が自らその価値を認識し、広く県内外に発信すると共に、「おもてなしの心」により訪れる人への安らぎを与えている。

■評価点

- ・平成 13 年 3 月に「山ヶ野金山文化財保護活用実行委員会」を発足。同委員会において、山ヶ野金山の復元や景観の保存作業及び伝統芸能の継承をはじめ、「山ヶ野金山史跡めぐりウォーキング」の実施及び「吹奏楽とホテルの夕べ」の開催を行い、山ヶ野地区とその歴史などを広くアピールするとともに、活発な交流を行い、地域の活性化を図っている。
- ・史跡めぐりウォーキングではボランティアスタッフとして、子供から高齢者までほとんどの地域住民が運営に取組み、参加者も年々増えリピーターも多い。また、地域内での交流が図られるとともに、運営するに当たって中学生等が地元の歴史を学ぶ良い機会となっている。



資料：総務省HP<<http://www.soumu.go.jp/c-gyousei/2001/kaso/h15hyoushou.htm>>

7. 笠祇の元気な里づくり

対象地：串間市笠祇地区（宮崎）

■実施団体：串間市笠祇地区

■受賞：平成 18 年度過疎地域自立活性化優良事例表彰（総務省）

■概要

「焼肉フェスティバル in 笠祇」を毎年開催し、地区外との交流を促進すると共に、知己の主要産業である和牛の PR を行っている。

農業体験交流としてそば作りやもち米栽培を種まきや田植えから収穫、試食会 1 年で計 5 回程度実施している。県内都市部からの参加者もあり、農業を体験してもらうとともに、地元食材をアピールしている。

伝統芸能であり、市指定の無形文化財である「てすおどり」を保存するとともに、他地域の伝統芸能との交流を図っている。

■評価点

- ・本取組みは、平成 4～6 年度に、串間市独自の地域振興事業である「むつかの里のまちづくり推進事業」で「和牛の里づくり」として指定を受け、現在も活発に活動を行っている。各事業の実施に当たっては、笠祇地区住民が主体となり連携しあって活動しており、行政は広報など PR に関するサポートを行っている。
- ・村おこし及び知名度の向上を目指す取組みとして始まった「焼肉フェスティバル in 笠祇」は、地区にある笠祇山の山頂で毎年行っており、平成 18 年度で 14 回を数えるイベントである。毎年 400 名を超える多くの参加者があり、地区の主要産業である和牛（笠祇牛）の PR や地区外との交流に貢献している。
- ・また、地元食材のすばらしさや里山の重要性を知ってもらうため、農業体験交流としてもち米づくりや野焼きの体験事業を行っている。これは、地区の資源や年間行事を活用した取組みで、地区外との交流を図るとともに、地元の伝統を保存することにも貢献している。



資料：総務省HP<<http://www.soumu.go.jp/c-gyousei/2001/kaso/h15hyoushou.htm>>

8. 「柚子の里づくり」で新産業を創出

対象地：日田市（大分）

■実施団体：株式会社つえエーピー

■受賞：平成 19 年度過疎地域自立活性化優良事例表彰（総務省）

■概要

株式会社つえエーピーは平成 4 年に、主として旧中津江村、旧上津江村、旧前津江村の 3 村と地域 JA の出資による農産物加工所として設立され、地域の特産品である柚子、林間わさび、こんにやく等の加工・販売に取り組んでいる。近年では地域を訪れる人々を対象に、ゆずこしょうやこんにやくの加工体験プログラムも提供している。

近年では、地元産の柚子を使った製品が主力商品となり、「ゆずはちみつ」が平成 16 年～19 年の 4 年連続で、世界食品コンクール「モンド・セレクション」で特別金賞を受賞するなど、ブランド化が進んでいる。

商品の PR については、自社の商品のみならず、地域の自然や人などを含め、地域全体を PR するよう工夫されている。

■評価点

- ・原料の特性を活かし、安全・安心な商品を消費者に提供するため、大学・県などの研究機関と連携し、高品質な商品の開発に取り組んでいる。また、従業員に調理師資格を取得させ安定した品質の商品を生産するとともに、自社での商品開発を可能にするなど、社内の能力開発にも積極的に取り組んでいる。
- ・近年では、地元産の柚子を使った製品が主力商品となり、中でも「ゆずはちみつ」が 2004 年～2007 年の 4 年連続で、世界食品コンクール「モンド・セレクション」で特別金賞を受賞するなど、ブランド化も進んでいる。
- ・平成 17 年度からは、旧日田市内の梨農家 140 戸が抱える規格外品の加工にも取り組んでおり、つえエーピーの次の主力商品として育つことが期待されている。
- ・独自の販路を開拓し、全国の食品業者・料理店・小売業者等、200 社を超える取引先を持ち、製品の需要量は年々拡大している。過疎地域にあって、従業員 25 名を抱える貴重な雇用の場に育つとともに、原材料を安定した価格で買い付けることにより、農家所得の向上にも大きな役割を果たし、地域の農林業の発展に貢献している。



資料：総務省HP<<http://www.soumu.go.jp/c-gyousei/2001/kaso/h15hyoushou.htm>>

9. 悠久のときの流れに包まれた英彦山

対象地：添田町（福岡）

■実施団体：添田町観光ガイドボランティア

■受賞：平成 19 年度過疎地域自立活性化優良事列表彰（総務省）

■概要

英彦山神宮参道沿いに残る史跡や自然、動植物などを紹介するガイドボランティアとしての活動を行うとともに、参道筋の清掃や福岡県指定有形民俗文化財『財蔵坊』（添田町歴史民俗資料館）の環境整備を始め、新たな観光資源の発掘のための山中研修などの活動も行っている。平成 13 年から都市との交流による観光促進のため、「ひこさん山伏の里探訪」を年 1 回開催している。参加者全員が山伏の装束である白い法被、頭巾を身にまとい、修験道にまつわる山伏問答を聞きながら英彦山路を散策する取り組みで、毎回 40 名から 70 名が参加している。

■評価点

- 添田町観光ガイドボランティアは、山形県の羽黒山、奈良県の大峰山と並ぶ日本三大修験道である英彦山（標高 1,200m）に町外から数多く訪れる観光客のニーズに応えるため、主に英彦山神宮参道沿いに残る史跡や自然、動植物などを紹介している。また、観光ガイドボランティアとしての活動を行うとともに、参道筋の清掃や福岡県指定有形民俗文化財『財蔵坊』（添田町歴史民俗資料館）の環境整備を始め、新たな観光資源の発掘のための山中研修など、添田町の観光 PR の先駆者としての活動も行っている。
- 平成 17 年度には、町が設置したスロープカーの中間駅（花駅）に、小学校の廃校を利用した観光案内所が設けられたことから、観光客は予約無しでも観光ガイドを受けられるようになり、より多くの観光客に英彦山の魅力を伝えられることとなった。
- 平成 13 年からは都市との交流による観光促進のため、「ひこさん山伏の里探訪」を年 1 回開催しており、参加者全員が山伏の装束である白い法被、頭巾を身にまとい、観光ボランティアによる修験道にまつわる話や山伏問答を聞きながら、英彦山路を散策する取り組みも行っている。



資料：総務省HP<<http://www.soumu.go.jp/c-gyousei/2001/kaso/h15hyoushou.htm>>

10. むらづくり活動

対象地：安心院町（大分）

■実施団体：松本集落

■受賞：平成 16 年度天皇杯受賞者（農林水産省）

■概要

営農組合を設立し、豆腐製造業者との全量契約により、基盤整備田の 8 割で大豆集団転作が始まった。この業者との関係が発展し、集落の大豆をこだわりの石挽豆腐として加工販売し、併せて集落の農産物や加工品を売るアンテナショップを大分市内に開設した。これにより今まで市場出荷できなかった野菜等の販路が確保され、高齢者や女性の農業者が活気づいているほか、女性の起業化が促進され、集落内に 4 箇所の農産加工所が開設されている。

さらに、集落内に農産加工所兼販売所を設置し、納豆加工に取り組んだり、企業との連携で純米酒製造に取り組むなど、経営の多角化が図られている。

集落の高齢者が若者や I・U ターン者の考えや行動を積極的に支持し、全住民参加によるむらづくりを実践している。集落を挙げた「ほたるの里の音楽会」や「夏の夜の映画祭」、森林資源を守る「森守クラブ」の活動や、生産活動を取り入れた「イモリ谷れんげ祭り」等を開催し、住民自らが楽しみながら集落グリーン・ツーリズムを企画・実践しているほか、集落のホームページを立ち上げ、地域の良さを多くの人々に発信している。

■評価点

- 本集落は営農組合による大豆集団転作に取り組み、実需者との結びつきの中から大分市内に集落のアンテナショップを設置し、商農連携による持続的な大豆生産、地域農産物の販路確保等による農業振興を図っている。
- 集落の若者や女性、I・U ターン者が高齢者の支持により集落活動に積極的に参加できる体制が整備され、集落住民自らが楽しみながら各種交流イベントや集落のホームページ開設等活発なむらづくり活動を展開しており、その結果、多くの I・U ターン者を迎えるなど地域活性化に大きく貢献している。

資料：農林水産省HP<http://www.maff.go.jp/www/press/cont2/20041022press_li.htm>

11. 「農業と観光が調和した地域づくり」を目指して 対象地：豊後高田市（大分）

■実施団体：ふき活性化協議会

■受賞：平成 18 年度天皇杯受賞者（農林水産省）

■概要

「ふき活性化協議会」は、地区内の全住民参加型のコミュニティ組織であり、むらづくり活動の企画・実行にあたっては、農業振興面では農事組合法人「ふき村」、生活・環境の地域づくり面では自治会の協力を得て、そのほかにも小中学校、体験交流宿泊施設等と連携して進めている。

■評価点

- ・「農事組合法人ふき村」の設立により 3 集落 1 農場方式を確立、経理の一元化を図るとともに、部会制を導入した。イベント等の開催を担う企画部会、草刈り・水管理等の全員作業に係わる作業部会、大型機械作業を担うオペレータ部会、ぶんご合鴨を飼育・販売する合鴨部会、特産品の加工販売を行う女性部会で構成され、ぶんご合鴨肉の「ゆうパック」や農産加工直売所「蓮華」に代表される 6 次産業化を図った農業経営が、それぞれの役割分担により効率的に実践され、平成 12 年以降は基幹的農業従事者数、農業生産額とも順調に増加している。
- ・国宝「富貴寺」を中心とした地域に伝わる様々な伝統行事を継承するとともに、将来を担う子ども達の育成に力を入れ、地区内の小中学生に対して、ぶんご合鴨や地域農業を教材とした食農教育や体験学習を実施している。さらに、近年、麓地区の良さに惚れ込んで移住する人が増え、平成 12 年以来、I・Uターン家族 24 名（総人口 233 名のうち約 1 割）を受入れ、若い人が増えたことで新たな集落の活力が生まれている。
- ・「国宝富貴寺ふれあいウォーク」を開催し、参加者の体力に応じて、麓地区を歩くことで農村の良さを満喫してもらっている。
- ・また、シンボルづくりとして、地区名に由来のあるツワブキを河川敷に植栽、さらになばな、レンゲ、茶、そば等の栽培による四季折々の景観づくりを行うとともに、体験交流宿泊施設における地元の食材を使った郷土料理の提供や体験交流プログラム等で都市住民にグリーンツーリズムを発信している。

資料：農林水産省HP<http://www.maff.go.jp/www/press/2006/20061017press_1c.pdf>

12. 道路清掃による村づくり 対象地：西原村（熊本）

■実施団体：西原村道路愛護会

■受賞：平成 17 年度手づくり郷土ふるさと賞（国土交通省）

■概要

熊本県阿蘇郡西原村の全域 42 集落からなる「西原村道路愛護会」は、50 年程前から毎年春、秋の 2 回、村内全域の県道（15 km）及び村道（100 km）を 42 地区に振り分けて、約 1500 人の参加により道路清掃を行っている。

■評価点

- ・木の枝落としや道路法面の草刈り、道路側溝の清掃などで、「自分たちの住む地域は、自分たちの手できれいに」を合言葉に地域住民も意欲的で、年中行事としての地域活動として十分定着している。この活動を行うことで、日常的に地区内の道路への注意が払われ、道路危険箇所の早期発見や事故の未然防止につながっている。また、村外の来訪者の方々からも「西原村はいつもきれいですね」と絶賛されており、当活動の実施により村が美しくなると同時に、村のイメージアップにもつながっている。
- ・道路清掃後には村長、議会議員等により「品評会」が行われ、地区毎に競うことにより、道路愛護意欲の高揚、活動の継続性、地域の活性化が図られている。



資料：農林水産省HP<http://www.maff.go.jp/www/press/cont2/20041022press_li.htm>

13. 島民手づくり展望台

対象地：五島市（長崎）

■実施団体：久賀島地区公民館

■受賞：平成 18 年度手づくり郷土賞（地域活動部門）（国土交通省）

■概要

平成 14 年に久賀島地区公民館が各町内会やボランティアグループに呼びかけ、久賀島を一望できる高所に、来島者のための観光場所と島民がくつろげる憩いの場を兼ね備えた手づくりの展望台をつくっている。平成 16 年には東屋の建設も行い、この 5 年間にツツジの植樹や「みどりの日」に島民参加のふれあい作業も実施している。また、折紙に展望台を整備することで「折紙」という地名が注目され、折紙神社の歴史や文化の研究も進められている。

■評価点

- ・自然に囲まれた久賀島を一望できる高所に、来島者のための観光場所と島民がくつろげる憩いの場を兼ね備えた手づくりの展望台を島民自らの力を合わせて整備し、維持管理を行っている。
- ・展望台建設により、島民のボランティア意識が高まり、「亀河原海岸の清掃」、「花いっぱい運動」、「空き缶ひろい」などへの参加者が増え、島の清浄化がすすんでいる。
- ・展望台は、久賀島を訪れる方々の観光スポットであるとともに島民の集いの場となっており、さらに今後も島民のボランティア活動による整備の継続性が見込まれる。



資料：国土交通省HP<http://www.mlit.go.jp/kisha/kisha06/01/011115_.html>

14. 安心院方式グリーンツーリズム

対象地：宇佐市（旧安心院町）（大分）

■実施団体：旧安心院町

■受賞平成 17 年度オーライニッポン大賞

（都市と農山漁村の共生・対流 関連団体連絡会）

■概要

宇佐市安心院町では、日本初の「グリーン・ツーリズム推進係」を設置するなど官民協働の推進体制を確立し、大分県や国が規制緩和措置を行うきっかけとなった「会員制農村民泊」の取り組みは日本の「農泊」の実践に大きな影響を与えている。

■評価点

- ・農泊を活かし、プログラム化せずに農村生活そのものを体験させる教育旅行受け入れシステムは、県内は下より他県にも広がりを見せ、これらの取り組みは全国でも「安心院方式」と言われ、高い評価を受けている。安心院方式の「農村民泊」は、あるがままの農家などの生活や家を活かし、無理をせず楽しみながら行う事が基本にあり、何も無いところからスタートし、まちづくりとしてみんなで取り組んでいる点の特徴である。
- ・グリーン・ツーリズムの教育的活用を強く意識し、次世代を担う子供たちに農業・農村のすばらしさを理解してもらう事を最終的な目標とし、農村体験学習を受け入れている。
- ・市内の約 60 軒の家庭で受け入れを行っており、家族の一員として同じ時間を過ごし、農村の生活そのものを体験させるプログラムでは、統一された体験プログラムでは味わえない安心院ならではのふれあいを重視した新しい形の体験学習となっている。
- ・子供たちの受け入れも会員制の形をとり、「1 回泊まれば遠ムスティでは、町内林業農家、高冷地野菜農家い親戚、10 回泊まれば本当の親戚」をキャッチフレーズに、次に繋がる仕組みにもなっている。



資料：都市農山漁村交流活性化機構HP<<http://www.kyosei-tairyu.jp/1>>

15. 絶滅危惧種の保護を契機とした農村環境の保全
対象地：久留米市（旧田主丸町）（福岡）

■実施団体：耳納塾・おたから堀の会

■受賞：平成 15 年度田園自然再生活動コンクール自然環境局長賞

■概要

絶滅危惧種のヒナモロコ（淡水魚）の生息地を中心とした農村環境の保全活動を実施。石積み・土床の多自然型水路「おたから堀」を設け、地域住民等が参加した水路の管理活動やヒナモロコ里親制度、子供たちによる飼育や自然体験等を展開

■評価点

- ・当初は絶滅に瀕した淡水魚の生息環境の再生をめざした活動であったが、その後、多くの住民と行政を巻き込んだ地域ぐるみの取り組みへと発展した。これらの取り組みは、これまでの生産性のみを追求する農業から、公益的機能面における農業の必要性や環境保全型農業への転換の先駆的事例である。
- ・同会は、学校教育との連携を重点課題としており、地域の子供たちに水路での環境学習会を実施している。



資料：農村環境整備センターHP<<http://www.acres.or.jp/Acres/denen/html/contest.htm>>
筑後川まるごと博物館運営委員会<http://www.ccm.jp/maru/group/midd_g/minoujyuku.html>

16. 阿蘇の草原保全運動 対象地：阿蘇郡一帯
（小国町、高森町、南小国町、産山村、西原村、南阿蘇村）

■実施団体：財団法人 阿蘇グリーンストック

■平成 16 年度田園自然再生活動コンクール自然環境局長賞

■概要

阿蘇の自然を後世へ引き継ぐことを目的に、阿蘇の草原維持のために都市からボランティアを募り、野焼きや輪地切り（防火帯）を実施。その規模は3500ha に及んでおり、人の手が加わることにより、阿蘇の自然環境が維持・向上。

■評価点

- ・阿蘇の畜産農家と都市市民とが連携して取り組む、新しい形の阿蘇の草原保全運動で、活動の継続性を維持するために、初心者研修会を年 3 回も実施し、門戸を広げている。
- ・「グリーントラスト募金」では、阿蘇郡内の町村役場や公営施設、ホテルなどに設置されている募金箱に 100 円募金をすると、絵本作家やイラストレーターのポストカード 1 枚がもらえる。その募金は阿蘇の草原や水資源、森林などの保全活動ならびに調査・研究活動への支援に使われる。
- ・都市市民がオーナーとなって放牧用の繁殖母牛を増やすと共に、あか牛肉の消費拡大にも繋げていくことを目的とした「あか牛オーナー制度」を近年開始している。



資料：農村環境整備センターHP<<http://www.acres.or.jp/Acres/denen/html/contest.htm>>
財団法人 阿蘇グリーンストックHP<<http://www.aso.ne.jp/~green-s/>>

17. 昭和30年代の農村風景の再現
対象地：高鍋町（宮崎）

■実施団体：四季彩のむら

■受賞：平成16年度田園自然再生活動コンクール オーライ！ニッポン賞

■概要

昭和30年代の農村風景の復元と、農地防災ダムの土取り場跡地を自然再生した高鍋湿原を含めた里地・里山の環境保全を目的に、景観活動や小学生の農業体験、収穫祭での都市との交流活動など、幅広く展開。

■評価点

- ・高鍋町は「四季彩のむら」の構想をより発展させて「頑張る地方応援プログラム」として町民に広く発信している。昔ながらの農村風景の再現と環境保全を軸とした町づくりを行い、農業の振興と観光客の誘致を目指している。さらに、高鍋湿原や高鍋温泉めいりんの湯といった資源も有効活用し、都市と農村の共生・交流を図ることも目的としている。
- ・ユニークなイベントとして、かかし作り体験などが開催されている。



資料：農村環境整備センターHP<<http://www.acres.or.jp/Acres/denen/html/contest.htm>>
高鍋町 HP<<http://www.town.takanabe.miyazaki.jp/policy/project.html>>

18. 行政に頼らない未利用資源を活用した集落づくり
対象地：鹿屋市（旧串良町）（鹿児島）

■実施団体：柳谷自治公民館

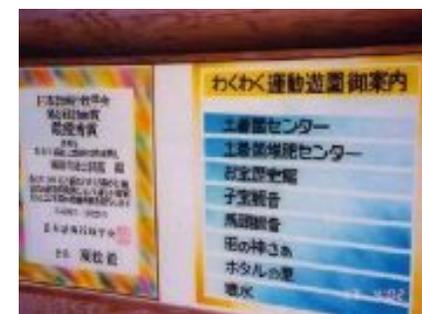
■受賞：平成17年度田園自然再生活動コンクール ムラと自然の再生賞

■概要

家畜排泄物への対応と家庭生ゴミの堆肥化促進を地域の課題と位置付け、土着菌を活用して、公民館活動により堆肥化等に取り組む。手作りの土着菌センターの建設、発酵堆肥を利用した焼酎用サツマイモの栽培、焼酎の製造・販売などを展開しながら、集落の福祉・教育等に還元。

■評価点

- ・行政からの補助金に頼らずに、集落民の資材提供・労力奉仕で、でんぷん工場跡地の町有地に、集落の活動拠点となるわくわく運動遊園を建設した。
- ・主たる自主財源確保として、生ごみや畜産ふん尿の発酵処理用の土着菌の製造・販売の他、集落民から無償提供された休遊地で「高校生クラブ」の活動として、集落民との共同によりカライモを栽培し、さらにオリジナル焼酎づくりに挑戦（製造・販売は酒造会社へ委託）している。
- ・集落内の小学5年生以上の希望者を対象とした週3時間の「寺子屋」では、リタイヤした中学校の数学・英語教員を講師に招き、月1000円の月謝とカライモ栽培の収益の一部で運営している。
- ・一人暮らしの高齢者宅の緊急警報装置、全戸設置を目指す煙感知器や防犯ベルなどは、各戸負担なしであり、カライモ益金等から充当している。
- ・集落内有線放送の効率的活用として、集落に居住する一人暮らしの高齢者の、集落を離れた子どもや孫たちのメッセージを高校生が代読する取り組みを実施している。



資料：農村環境整備センターHP<<http://www.acres.or.jp/Acres/denen/html/contest.htm>>
農林水産省立ち上がる農山漁村 HP<<http://www.maff.go.jp/tatiagaru/H1629yanagitani.htm>>

19. めだかの保全と棚田を活用した地域活性化

対象地：日置市（鹿児島）

■実施団体：尾木場地区めだかの里保全委員会

■受賞：平成18年度田園自然再生活動コンクール 美しい郷と営み賞

■概要

メダカなどの多様な生き物が生息する棚田を保全するため、農道・ため池等の点検整備や清掃活動などの共同作業を長年にわたり実施するとともに、米づくり体験、山菜狩り、秋まつりなど、棚田を活用した地域活性化を実現。

■評価点

・明治時代に開墾され、ため池や周辺森林からの湧水により稲作が行われている棚田において、環境保全の面から「めだかの生息する稲作り」をキャッチフレーズに、集落の農家が減農薬栽培に取り組み、集落内の農家が共同して農村景観の保全に努めている。また、生産した米を「尾木場棚田めだか米」として販売している。

・都市と農村との交流を推進するために、米づくり体験や山菜狩り体験などのイベントを開催している。また「高山地区秋まつり」では、「めだかの里探索」としてコースが設定され、都市住民が「癒しの場」としてこの農村の素晴らしい景観と豊かな自然を満喫している。



資料：農村環境整備センターHP<<http://www.acres.or.jp/Acres/denen/html/contest.htm>>
九州農政局 HP<http://www.kyushu.maff.go.jp/houdou/data/15172754_1.pdf>

20. 大分県、福岡県の県境を越えた山国川流域を単位とする地域づくり活動

対象地：中津市、豊前市など県境2市5町3村（大分・福岡）

■実施団体：特定非営利活動法人 豊前の国建設倶楽部

■受賞：平成15年度オーライ！ニッポン大賞

■概要

県境地域は、人・物・情報が行き交わない行政の谷間となることが多いが、明治の廃藩置県までは同じ「豊前の国」という共通認識を背景に、福岡県と大分県の県境沿い流れる山国川流域の2市5町3村を単位とする広域の地域づくりを推進している。

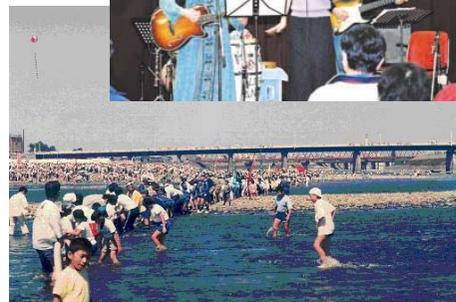
■評価点

・大分県対福岡県山国川水上綱引き合戦は、県境の山国川を挟み河口で400mの大綱を引き合うもので、行政の垣根を越えた地域交流を図るものである。

・山国川の上流の交流については、下流域の中津市漁協の有志が漁船を出し、上流域に住む農林業者を招待して、底引き網漁を行い、海の環境や自然の威力、漁業の実情について体験する行事も開催されている。また、そこで取れた魚を肴に、上流の蛸鑑賞交流も行われている。

・都市の元気を上流に、田舎の癒しを都市の方々にと、都市と田舎の共生をテーマとして、著名なミュージシャンを招いて水辺のコンサートを企画することで、都市住民の自主的な参加がリーダーとなり、ネットワーク拡大につながっている。

・風倒被害を受けた山国川源流の国有林を、営林署から貸借し、都市や下流域の住民とブナの苗木を植樹する「山国川エコ・リバー・ツーリズム源流の森」構想事業を展開している。



資料：農林水産省オーライ！ニッポン大賞事例集HP<<http://www.maff.go.jp/nouson/seisaku/ourainippon/index.htm>>
防災まちづくりポータルサイトHP<<http://www.udri.net/portal/matidukuri/jirei/jireinew/syousai2.htm>>

21. 島内、離島へのI・Uターン希望者に対する農業研修支援活動
対象地：奄美市（鹿児島）

■実施団体：財団法人 奄美市農業研究センター

■受賞：平成15年度オーライ！ニッポン大賞

■概要

農業の後継者不足が叫ばれているが、とりわけ離島では若年者の都会志向が強く、後継者の確保にとどまらず、農業の維持すら厳しい状況である。そのため、昭和60年から名瀬市で行っていた農業技術研修に関する事業を、平成11年度から財団法人名瀬市営農センターが引き継ぎ、農業後継者の確保を図るため、島内および離島へのI・Uターン者に対し、1年の間、農業技術及び技術に関する知識を習得できる研修支援を行うことを主な目的とした活動を行っている。

■評価点

- ・研修は、離島でかつ亜熱帯気候に適した農業経営を行うのに必要な農業技術、経営管理に関してであり、専門の講師陣が1年間の研修期間で指導する。主な研修内容は、農業の基礎知識講義64時間、作物別専門講義62時間、先進地視察などの特別研修となっている。研修の対象者は、義務教育を終了した島内居住者と島外居住者で、研修後名瀬市において農業に従事できるおおむね50歳までの健康な人である。
- ・研修期間中には、1日あたり4,000円の作業手当を支給、さらに研修後の2年間はサポート事業として農機具やハウス、堆肥の無償貸付や提供を行っている。
- ・これまで、研修生71名に対し、約7割の47名が新規参入者として就農し、そのうち18名は島外からのIターン者であり、農業後継者の確保と併せて都市と農村の交流にも貢献している。



資料：農林水産省オーライ！ニッポン大賞事例集-HP<<http://www.maff.go.jp/nouson/seisaku/ourainippon/index.htm>>

22. 廃校を拠点に自然体験やものづくりを通して地域間交流をめざす農村自然学校
対象地：南九州市（旧川辺町）（鹿児島）

■実施団体：かわなべ森の学校

■受賞：平成15年度オーライ！ニッポン大賞

■概要

小学校の廃校跡を拠点とし、都市と農村の交流を通じて農村社会の地域づくりと都市生活者の癒しをテーマに①農業体験や暮らしの知恵を学ぶ農村体験、②ものづくりを通して創ることの喜びや、ものに対する感謝を知る工芸体験、③自然に触れることで環境意識を醸成し、自然や生命に対する世界観を育む自然体験、という3つを柱に活動している。

■評価点

- ・地域外居住者の北島氏という「よそ者」がはじめた活動であったが、氏はまず、地域にとけ込むために、地域の活動（PTA・小組合・地域づくり活動など）に率先して参加した。次いで、森の学校の体験指導者として地域住民に参加してもらい、都市農村交流やグリーンツーリズムに対する意識の醸成を図った。以上より、地域住民からの理解・協力を得て、地域を巻き込んだ活動となるとともに、地域住民自身もふるさとの新たな価値を発見し、廃校となって求心力が低下した地域に新しい地域づくりの柱ができた。
- ・森の学校では、年間を通して、ものづくり、グリーンツーリズムや自然体験といったプログラムを会員制で実施し、また予約制で一般の一日体験サービスも提供しており、町内外の保育園・小学校の体験学習や農業団体、まちづくり団体の研修視察も多く受け入れている。
- ・活動を開始して6年、鹿児島市在住の市民を中心に、年間2,000名以上が森の学校を訪れ、そこでの様々な活動による地域経済への波及効果は平成15年度で約400万円を見込んでいる。活動を通じてIターンによる新規就農者も出てくるなど、定住促進にも貢献している



資料：農林水産省オーライ！ニッポン大賞事例集-HP<<http://www.maff.go.jp/nouson/seisaku/ourainippon/index.htm>>

23. 村全体のテーマ性の統一と交流人口増加による地域づくり
対象地：西米良村（宮崎）

■実施団体：西米良村

■受賞：平成17年度オーライ！ニッポン大賞 審査委員長賞

■概要

基本コンセプトを「九州中央山地一ツ瀬川源流・生涯現役元気村【カリコボーズの休暇村・米良の庄】と設定し、村民が健康で長生きし、生涯現役元気むらづくりを目指し、交流人口促進による村の活性化を図るとともに、快適な定住地の形成に努めながら魅力ある自然や風土、歴史、文化など地域固有の資源にテーマ性を持たせた地域づくりを推進している。

■評価点

- ・具体的な戦略プロジェクトとして「8つの庄づくり」（町づくり、健康づくり、湖遊び、語り部、花づくり、川遊び、匠、交流滞在）を行っている。
- ・1998（平成10）年から全国に先駆けて始めた「西米良型ワーキングホリデー制度」では、受け入れ農家は農作業の人手不足を解消するとともに、都市部の人々は働きながら田舎生活（観光旅行）を楽しめるなど双方にメリットがあり、さらに、村民と村外者との交流を村の活性化につなげるものである。
- ・参加者の報酬は1人1日（7時間）4,270円。双子キャンプ村に3,000円で宿泊でき、滞在費用はほとんどかけずに余暇を過ごすことができる。



資料：西米良村HP<<http://www.nishimera.jp/01/index.html>>

（財）都市農山漁村交流活性化機構HP<http://www.maff.go.jp/www/press/cont2/20050216press_5d.pdf>

24. 広域的なネットワークによる農漁業体験型の観光推進
対象地：松浦市ほか（長崎）

■実施団体：NPO 法人体験観光ネットワーク松浦党・松浦体験型旅行協議会

■受賞：平成18年度オーライ！ニッポン大賞 グランプリ（内閣総理大臣賞）

■概要

広域的に松浦地域を対象として、地域資源を活用した体験型の観光商品の研究・開発を推進することにより、交流人口の拡大を図っている。ターゲットは東京など都会で暮らす旅行者や修学旅行生で、テーマは松浦地域のありのままの姿や普段体験できない農業や漁業の仕事を体験してもらうことである。

■評価点

- ・松浦地域を対象にした広域的な地域資源を活用した体験型観光振興策「海洋クラスタ一都市構想」を活動の発端として交流人口の拡大に活路を見出し、1995年から構想の実現に向けて研究が始まり、2002年から観光商品の開発を進めるとともに、旅行代理店と一緒に「松浦党の里ほんなもん体験」というツアー名で営業を開始。03年度には約1000人の生徒を受け入れた。04年度には約3300人、05年度には約4500人の生徒の受け入れを実施している。06年度は約1万人に達する見通しという。
- ・民間主導のコーディネート組織である「松浦体験型旅行協議会」と、担い手からなる13地区の受入組織である「特定非営利活動法人体験観光ネットワーク松浦党」が協力して実施している。
- ・1日最大2,000名が対応可能な民泊と農村・漁村を舞台にした豊富な体験プログラムで修学旅行生を中心に受入れを行っている。この取組により、農漁業と体験型観光が一体化することで、地域住民の収入の安定化に繋がり、さらに住民に誇りと地域に活力が生まれ、地域の生業と結びついた新たな地場産業の創出も期待される。
- ・メニューは漁業体験として定置網漁や刺し網漁など、農林業体験ではシイタケ栽培や酪農作業、炭焼きなどのメニュー、このほかに味覚体験としてアジの開きづくりなどである。さらに自然歴史体験としては元寇や松浦党の史跡など探訪、アウトドア体験ではシーカヤックなども用意している。これらは「学校が求める体験メニューを提案する」ことを念頭においている。



資料：（財）都市農山漁村交流活性化機構HP<http://www.kyosei-tairyu.jp/award08/jirei18_2.html#01>

中小企業ビジネス支援サイトHP<<http://j-net21.smrj.go.jp/expand/shigen/jirei/matsuuratou.html>>